

阪神タイガース優勝髭

山本通夫先生を偲んで



山本通夫氏略歴

一九三二年七月二日生まれ。五七年同志社大学文学部卒業後、学校法人近江兄弟学園教諭を経て、六二年同志社中学校教諭として入社。八〇年四月開校の同志社国際高等学校教諭に着任、八四年から八八年まで校長を務められた。九八年に定年退職されるまで三十六年にわたり教育に尽力された。二〇〇一年六月二八日永眠 六十八歳

同志社国際高校は一九八〇年四月に開校しました。

当時、法人内四中高よりベテランの教員数人が着任しました。その一人が山本先生でした。先生は長年、同志社中学で国語科の教員として、多くの生徒を指導してきた実績を持っておられました。

本校でも、生徒、教職員に対して、温か味のある接し方で先生のご存在は大きく、開校五年目には第二代の校長にご就任になりました。私はちょうどこの年から先生の強力なバックアップをいただいで、ニューヨーク日本人学校の教員に赴任することができました。したがって、先生のご苦勞は日本から届く手紙や、来訪者から聞く事にとどまっていたと思います。

国際高校は、国内では三番目、また、関西でははじめての帰国生徒受け入れ校でした。教育面では、習熟度別授業の充

実を計られ、帰国生徒三百人が入寮できる寮があり、生徒指導の難しさもありました。一方、経理責任者としては、軟弱な財政の健全化に対して、大変努力され貢献されました。

さる九月三十日に同志社教会で執り行われた先生の追悼礼拝には、本場に大勢のすつかり成人した元生徒たち、さらにその父母が集まったことは先生の教師としての人生がいかに充実したものであったかを表す何よりの証しであったと思います。

また、先生はもう一つの働きとして、同志社教会の担任教師として、お亡くなりになる直前まで務めておられたことをあげることができます。

晩年の先生は見事なお髭を蓄えておいででした。そのお髭をしごきながら日曜毎の教会の入り口で来会者をにこやかに

お迎えになっていたお姿は今も心に残るものです。このお髭は今は昔阪神タイガースが優勝した年「阪神が優勝するまでは髭はそらんど」とおっしゃった時以来のものだと先生から伺いました。その後の阪神タイガースは皆様ご存知の通りです。

先生が命をかけてお働きになった同志社国際高校（今では中学校を持ち、国際中学校・高等学校を名乗っています）は現在立派に法人内の一高校としてその存在を認められています。私立学校を取り巻く社会環境、経済環境はますます厳しさを増してはありますが、残された我々は先生のご遺志をついで頑張っていることを天国の先生にご報告し、心から先生の魂の安らかなることを祈るものであります。

日下部健介（国際中学校・高等学校教諭）

「『生』の儘の人間」を愛された 谷口敏郎先生を偲ぶ



谷口敏郎氏略歴

一九〇六年二月三日生まれ。三〇年同志社大学文学部卒業後、同志社大学文学部助手として入社。京都基督教青年会英語学校講師、京都商業学校教諭などを経て、四六年同志社外事専門学校教授として入社。四九年同志社大学教養学部助教授。五〇年一月同教授、五一年文学部教授、六一年同大学院文学研究科教授に就任。七四年同名教授。二〇〇一年八月五日永眠。九十四歳

谷口先生は先頭に立って旗を振る人ではなかった。縁の下を支えることに徹しておられた。人を愛で包まれる人であった。これが長年、親しくさせていたたい私の谷口先生像である。

卒業論文でイエイツを論じられた先生が、いつ頃からアメリカ文学を専攻されるようになったのか知らないが、新制度の草創期の英文学科にとってグラント先生とともにアメリカ文学ではなくてはならない人であった。関西アメリカ文学会や初期の京都アメリカ研究夏期セミナーで、上野直蔵先生を支えて、同志社にアメリカ文学があることを外に示す役割を担われた。

エマソン、ソーロー、ホイットマンを研究の中心に置いておられたが、先生にはホイットマンが似合う。「見給え、肉体はその重要関心事である意義を包含

し、また意義そのものであり、また、それは魂を包含し、魂そのものである。／君が誰であろうと、君の肉体或はそのどんな部分も、いかに壮麗であり、また、いかに神聖であることか！」（『ボウマノクを出発して』（長沼退）より）と、ホイットマンは歌ったが、先生も『生』の儘の人間（『ホイットマンの一考察』『人文学』第十八輯）に魅了された人だった。

大学紛争が同志社でも始まった一九六九年、私は先生に学生主任をお願いした。バリエードの中で学生と話をして出てこられた先生の第一声は、「やり方はおかしいが、いい奴らですよ」だった。

先生にはお願いばかりしていたが、一回だけ頼まれたことがあった。先生の在外研究が急に決まったので、ご不在中の代役である。三年次生の演習で、テキストは『ソーロー著作集』『ウォールデン』

は、ご自身に残すようにとのことで、私は『コンコードとメリマック川の一週間』を担当した。ところが割があたった。辞書を引きまくったが、実感がわかない。植物の日本名は分かっても、どんなものかさっぱり分からない。おそまつな代役であった。一九六六年の前期だった。

花いじりや絵を画くことも楽しまれた先生は、ヴァイオリンに凝っておられた時もあった。弾きながら「上海帰りのリル」を陶醉して歌われたお顔は今も忘れられない。そんな先生に晩年もう一つの趣味が加わった。能面彫りである。亡くなられる前年、如山会能面展に出品された翁の面はやさしい顔だった。その十カ月後、同じやさしい顔と再会した。葬送式のあと、棺の中の先生にお別れのお花を献じた時である。

岩山太次郎（大学文学部教授）

世界の最高を目指して 弾性論・材料力学とともに

— 中島夏樹先生を偲んで —



中島夏樹氏略歴

一九二七年七月一八日生まれ。六〇年同志社大学大学院工学研究科修士課程修了後、六一年同志社大学工学部助手として入社。六四年同専任講師、六七年同助教、七五年同教授、七八年同大学院工学研究科教授に就任。九三年に定年退職されるまで、三十二年にわたる教育と研究に尽力された。二〇〇一年一月四日永眠。七十四歳。

中島夏樹先生はこよなく同志社を愛し、豊かな感性と、逞しい創造力、繊細な心をあわせ持つ、慈愛に満ちた先生でした。「機械工学とは鉄と蒸気機関である」といいながら教壇に立つておられた姿には、先生の教育への強い情熱が感じられました。

専門は弾性論。主として、無限平板の応力解析で、三角関数と双曲線関数を取り入れた応力関数について、フーリエ級数を用いて理論解析を行い、精密な光弾性実験にて理論の検証を行うものでした。

理論解析は、無限積分の形を含むため、膨大な数値解析を行わねばならず、それは電子計算機が未だ無かった時代、手廻しの計算機を時間の許す限り廻しながら、解を求めるといふ忍耐の必要な分野でした。それは目的に向かってまっしぐら

らに突き進む純粋な精神と意欲が必要の研究でありました。電子計算機の発明・進歩と共に、その多大の労力は必要でなくなり飛躍的に研究成果は実りました。

また、一方で先生は、実社会での経験をもとに機械工学の教育において、専門としての弾性論や材料力学の分野のみでなく、学際領域の重要性を強調され始め、特に大学院においては、機械工学を中心に、哲学・宗教・芸術・音楽・歴史などの文化論を織り混ぜながら幅広い人間性の育成に情熱を注がれたのです。学生たちは、その中から人間にとって、本当に大切な物は何かを自分の体で掴み取り、いらない物は捨て去る術を体得して育って行きました。さらに、日常の研究室では、音楽を楽しむ、お茶を味わい、時間と空間を越えて議論に熱中し、納得いくまで学生との対話を続けておられた姿が

思い出されます。その奥には機械工学の奥義を伝えようと努められるとともに、育ち行く学生の幸せを願われる思いがひそんでいたのでしょうか。

世界の超一流のカメラをいじくり、最高級のスピーカーからの音を聞きながら、卑弥呼の謎は解けたと古代史を語り、宇宙の果てが見えたと宇宙論を展開されている様子は、今思い出しても懐かしい思い出として心に残るひとつであります。ゼロとイチで全てを解決しようとする現代のコンピュータ社会に対して、工学とは、また科学とはその本質を追求されていたのかと思うと、今一度ゆつくりとお話を伺いたい思いでいっぱいであります。

ご冥福を心よりお祈り申しあげます。

今井田 豊（大学工学部教授）